

キリスト教と英米文学

——キリスト教的文学批評試論——エミリー・ディキンソン論

森 谷 峰 雄

はじめに

現在筆者は、純粹の學術論文とは別に、多少くだけた——或は價值判斷的など言うべきかも知れない——文學批評を試みている。これには二、三の理由がある。

一つには、あたりを見回すと、余りにも破壊的・不道德な文学又沒價值觀念が横行しすぎて憂うべき狀況が我々を覆っているように筆者には思えるからである。

しかし、こう申しても書く事柄は形式的な判斷ではなくて、眞の意味での眞理 (truth) を求めている。その意味では自由 (freedom) な精神の発露は妨げられていない。

現在、いずれの大学に於いても一般教育科目、外国語科目のあり方が問題となっている。外国語教授は語学の実用面と教養面との二つからなっていて、両者領域間の対立が度々教育界のみならず実業界、政治の世界でも論争の対象とされてきた。^①端的に筆者の考えを申せばクラス別に教養主義あるいは実用主義のいずれかに徹することが肝要で

ある。大学の外国語科目に対する批判はこの点をいいかげんにしてゐるところに向けられているのではなからうか。教室の目標をいずれかに定めて二兎を追わない覚悟と一種の諦めを必要とする。

たとえば、ある一つのクラスで実用面の能力を開発するのを目標にしたならば、まず、たとえば海外の短波放送の録音を副教材に聴解能力開発から始めて口頭による運用能力を開発していく。この場合に市販のテキストの選択が大切である。小説類を材料にしたテキストで語学の運用能力を開発することは不適切であらう。

しかし、教養主義を目標に掲げたならば、その教科教授を通して、人は變動する世界にあって如何に生くべきか、人生の目的、世俗の利益を越え永遠に不変の眞理に対して目を開かせることに徹しなければならぬ。この観点から、道德的墮落を助長し享樂の世界へと心向けしめる内容を持つテキストは排除されねばならぬであらう。^②(ここでは研究という仕事は別次元にしている。)

三つには、日本の大学で文科・理科を問わず、一般教養科目は比較的低級とされ、この科目は大学人が本分とする研究には価しないと考

えられてきた。筆者はこのような精神風土に挑戦する。このような志を持ったグループの存在も知っている。^③ 筆者は過去十年近く複数の大学で所謂英語科目を教えてきて、今もそうである。最近、一般教養科目に対して、これは次代に前に触れた目的を持つ文化の伝達上、貴重な教科であるという認識が生じつつある。そこで、この数年学生と共に学んできたテキストを研究材料に批評試論に取り組んでいる。扱っている詩人・作家はカーライル、エマーソン、エミリー・ディキンソン、テニソン、エミリー・ブロンテ、D・H・ローレンス、等々正に手当たりしだいの教材を研究材料としている。今回はこの中、エミリー・ディキンソンを取り上げた。これらは筆者が本学及び立命館大学で取り上げたものが殆んどである。一連の批評試論がなるまでには未だ数年を必要とするであろう。

以上の三つの理由で批評試論に取り組み始めたのであるが、果して理想通り成果が得られるか未知数である。初めにも申した通り、学術とは別の目的を持ったこの文章が粗雑な論の運びとなったことに対して読者の御寛容を請う。

註

- ① 数ある論争文の中で次のものを掲げる『英語教育問題の変遷』（研究社、昭和五十四年）。この中で『平泉試案』の社会的背景（森常治）が興味深い。
- ② ニュアンスは異なるが現に立命館大学外語連（外国語科連絡協議会）ではテキストの選択に当り、非民主主義的・民族主義的・人種的・その他差別を記載するテキストを避けるよう規定している。
- ③ たとえば『英米文学の鑑賞』『英米小説の鑑賞』『英米詩の鑑賞』（以上創元社刊）等に於ける大学英語研究会がある。

エミリー・ディキンソン論

私がディキンソンを知ったのは大学でアメリカ詩を福田先生から教った大学三年の時であった。当時、日本語では新倉俊一氏の書物しか出ていなかったが、私は彼女の信仰の面から興味を持っていた。^④ 彼女の詩の中で最も優れていると言われているのは次の詩である。

Because I could not stop for Death,
He kindly stopped for me;
The carriage held but just ourselves
And Immortality.

We slowly drove, he knew no haste,
And I had put away
My labour, and my leisure too,
For his civility,

We passed the school where children played,
Their lessons scarcely done;
We passed the fields of gazing grain,
We passed the setting sun.

We paused before a house that seemed

A swelling of the ground;
The roof was scarcely visible,
The cornice but a mound.

Since then 'tis centuries; but each
Feels shorter the day
I first surmised the horses' heads
Were toward eternity.

(私が「死」のために止まることができなかったので
死の方が私のために止ってくれた。
馬車はたった私達と「不滅」だけを
乗せた

私達はゆっくり手綱を取り、彼は急ぎを知らなかった、
そして私は労働と余暇をも
彼の礼儀正しさの故に
捨ててしまっていた

私達は子供達が遊んでいた学校を通った、
彼らの授業はもう終ろうとしていた
私達は凝視する穀物畑を通った、
私達は沈みゆく太陽を通った。

私達は地面の高まりのように思えた

家の前で一休みした。

屋根はほとんど見えず

軒蛇腹は盛土にすぎなかった

それ以来、幾世紀も経た、だが、各々は

馬の頭は永遠に向けられたと

私が最初に推測した

その一日よりも短かく感じられる。)

この詩の原稿は一八六三年頃に出来ており、一八九〇年“The Chariot”という題で出版された。右の引用の詩は原稿の第四スタンザが省略されたままになっている。^②

この詩の、特に最後のスタンザを読んだ時私は聖書の次の句を不思議と思ひ出す。長くなるがそうしなければ読者―特にバイブルになじみのない―に何のことか理解されないとと思われるので、その引用を許されたい、

「この日、ふたりの弟子が、エルサレムから七マイルばかり離れたエマオという村へ行きながら、このいっさいの出来事について互に語り合っていた。語り合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。しかし、彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。イエス

は彼らに言われた、「歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことなのか」。……そこでイエスが言われた、「ああ、愚かで心のにぶいたため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」。こう言って、モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしてある事どもを、説きあかされた。それから、彼らは行こうとしていた村に近づいたが、イエスがなお先へ進み行かれる様子であった。そこで、しいて引き止めて言った、「わたしたちと一緒に泊まり下さい。もう夕暮れになっており、日もはや傾いているす」。……それから、イエスは彼らをベタニアの近くまで連れて行き、手をあげて彼らを祝福した。祝福しておられるうちに、彼らを離れて、「天にあげられた。」彼らは「イエスを拝し、」非常な喜びをもってエルサレムに帰り、絶えず宮にいて、神をほめたたえていた。」（ルカ伝第二十四章十三—五十三節）

右は所謂エマオの途上のイエスの復活とその弟子達との出会いからイエスが昇天される記事である。このエマオの途上は特に有名で、レオンブリントもこれを題材に絵を描いている。何故、エミリイ・ディキンソンの詩を読んで右の聖書が思い浮かぶのであろうか。一口に言えば、永遠者と共に一時的に生活したことへの回想である。過去の出来事への記憶は時間の経過を超越する。精神の時間に対する克服が回想時に生ずる。何か不思議な雰囲気に含まれた無心の世界、楽園に帰っ

たような錯覚に陥る。

又、ディキンソンのこの詩を読むのと同じ雰囲気味わうのはベートーヴェンの「英雄」(“Eroica”)第一楽章の第一主題が終り、第二主題が始まる迄の過程に於いてである。ロマン・ロランはこの曲が二つの要素、(1)流れの方向と句配を示す転調、(2)渦を巻く流れの速さ—暗礁からなっていてそれが反復されていると述べている^⑤。この反復の効果が、何か今までのものは遙か昔の出来事であったのですよ、と言わんばかりの雰囲気醸し出しているのだらう。この「総体的雰囲気」は最初の一瞬间に示されている、とロランは言っている^⑥。第二楽章の「葬送行進曲」はナポレオンが一八二一年にセント・ヘレナで死んだ時、ベートーヴェンはこれを予期して彼の最期を曲で表わしたものであると言ったそうである^⑦。彼はナポレオンの即位を聞いた時、「あの男も要するに俗人であった。あれも自分の野心を満足させるために、民衆の権利を踏みにじって、だれよりも暴君になるだらう」と叫んで、その時彼が“Bonaparte”としていた曲名のはいった楽譜の表紙を破り取り、二年後の譜には“Sinfonia eroica”とし、その下に「一人の英雄の思い出を祭るために、作曲された」と書き足したと言われる^⑧。即ち、この曲は全体的に言っても一つの思い出としての意味がある。英雄—この言葉は日本人に理解されていない^⑨—が死を遂げて時が経った。しかし彼が残した精神を受け継いだ者が彼を思慕する時に、時空を越えて今、この時英雄が天に飛び立ち、広くその精神が広がっていくような気分である。

この気分は黄昏が人間の心の中に引き起こす気分でもある。それが

絵画に表わされたものがミレー (Millet, Jean François, 1814—75) の『洗濯女』(the Washerwomen)—cf. 1853—5—や『晩鐘』(the Angelus) —1859—であろう。その中に表現された永遠性、平和、祝福、敬虔がたそがれていく自然と渾然一体となっている。(ディキンソンの詩の“the Setting Sun”イエスのエマオの復活の夕暮、更にミレーの絵のいずれもが時を同じ夕暮れとしていることに気付かれる)

ミラー (Ruth Miller) は彼女の詩的靈感の源泉は天にあると述べている。^⑧ ベートーヴェンにせよ、その靈感は神より来た。つまり、彼女の芸術の本質は同一であると言い得る。それ故に、その作品を鑑賞する心に一種の懐かしさ、望郷の念を覚える。この心が今迄述べた作品の中に共通して流れている感情である。ドミニ・ドノグ (Denis Donogue) もこの点を把えて、「推移の循環」(“circle of lapse”)と言っていると考えられる。^⑨ 唯、靈感によって天来的に創作されたと言っても、何もないところから生まれたのではない。その故にこそヘーデルは靈感を内容と結びつけて考えたのである。^⑩ そこに到るまでには彼女の創造精神が活動していたのである。この詩の創作過程について Jack L. Capps が述べているのでそれを紹介しよう。^⑪ 彼によればこの詩には二つのイメージが合成されている。アマーストの彼女の家族と親しくしていた Dr. Jacob Holt という若い歯科医が一八四八年五月十四日病気で死んだ。彼は詩人で彼の“Bible”という詩は *The Hampshire and Franklin Express* に載せられ、エミリーはそれを大切に彼女の聖書の見返しに転写して“Composed by Dr. J. Holt during his last sickness”とその詩の終りに付記した。Capps はこの詩の内容を紹介して

いないが、余程エミリーの琴線に触れたものと思われる。ここに彼女の詩的創造精神は生じる。彼の死を悼んで三連の哀歌が *Express* 紙上に発表された、その詩の最後の連は次のようになっていと言われる、

……It was quite near the close of the Sabbath, —
Just as its sun was setting, —that death came,
And gave the spirit its long-sought release,
Not in his terrors did death then appear,
But came like some kind angel of mercy,
Whose delightful mission it is to bless.
Oh how sweet for the Christian thus to die!
And exchange an earthly Sabbath, for one
That is heavenly, and never to end.

(……安息日の終りに近く、
太陽が正に没せんとした時死は訪れ、
魂に久しく待望せる解放を与えた。
死は恐怖の姿に現われず、
慈悲の親切な天使のように訪れた、
祝福がその楽しき役目なり。
オウ、キリスト者の死は何と甘美なるかな……
地上の安息日を天上のそれに

代え、永久に尽きることなし。)

右の詩の "Death, the gentle caller who arrives as the sun is setting to offer the immortality of a Sabbath" のイメージと R・ブラウニングの *The Last Ride Together* の "a chivalrous gentleman riding in the company of a congenial feminine companion" のイメージとを融合して、この詩を創ったのであるとキャプスは言う。これらのイメージを外的な材料として、彼女の創造精神を燃焼させたのである。

一連、二連、三連で作者はどこへとも知れず旅立つ。特に三連に見られる時間、空間の経過を表わす "passed" が三回繰り返されていく。馬車が学校、畑そして夕日を通り過ぎて行く。第四連に於いて彼らはある家に着く。次に第五連で回想が歌われる。

Since then 'tis centuries, but each
Feels shorter than the day
I first surmised the horses' heads
Were toward eternity.

(それ以来、幾世紀も経た、各々は
馬の頭は永遠に向けられたと
私が最初に推測した
その一日よりも短かく感じられた。)

キリスト教と英米文学

この詩が彼女の詩の中で最も優れているものになっているのはこの五連に於いて思慕された永遠が時空を超越して作者に身近かに存在していることである。遙かなる昔が一挙に現在に飛んでいる。「主にあつては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである」(ペテロ後書三の八)という言葉の意味は今のこのディキンソンの詩にも妥当する。詩はしかし概念を語るのではなく獲得された感情を語るものである。右の引用の言葉の意味の一端が感情となって表わされたのが右の連である。

先にも、エマオ途上の出来事を例にあげたが、この感情は又福音書又伝徒行伝の各々の終りの部分を読む時にも起つて来る。具体的に各各引用しよう。

「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」(マタイ伝二八の二〇)

「主イエスは彼らに語り終つてから、天にあげられ、神の右にすわられた。弟子たちは出て行つて、至る所で福音を宣べ伝えた。主も彼らと共に働き、御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった。」(マルコ伝一六の二〇)

「それから、イエスは彼らをベタニアの近くまで連れて行き、手をあげて彼らを祝福された。祝福しておられるうちに、彼らを離れて、「天にあげられた。」彼らは「イエスを拝し、」非常な喜び

をもってエルサレムに帰り、絶えず宮にいて、神をほめたたえていた。」（ルカ伝二四の五〇—五三）

「イエスのなさったことは、このほかにまだ数多くある。もしいちいち書きつけるならば、世界もその書かれた文書を収めきれないであろうと思う。」（ヨハネ伝二一の二五）

「パウロは、自分の借りた家に満二年のあいだ住んで、たずねて来る人々をみな迎え入れ、はばかりず、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えつづけた。」（使徒行伝二八の三〇—三一）

右の記事はいずれも約二千年の昔に起った出来事がその時に書かれたものである。遙かに遠い昔の出来事ではあるが、永遠者なるキリスト・イエスは今尚臨在し給うが故に、時の経過・場所の隔りを越えて右の記事は今尚、我々の魂の中に生きている。何か不思議な超越的世界に侵っている感覚を覚える。この感覚がディキンソンの“each I feels shorter than the day”に流れているそれと類似する。かかる感覚を読者に与えるが故に彼女の詩は優れたものになっているのである。

次にこの詩のリズム感を分析してみるとそこに普遍的な形式が見られる。この普遍性が右の詩の優れた点ともなっている。

第一スタンザから第四スタンザまではテイトも言うように、「行動

のパタンに流動性^④がある。しかし、第四スタンザには行動に伴う流動性はない。つまり、第一スタンザから第三スタンザまでは作者と死が馬車に乗ってとある家に着くまでを歌っている^⑤。馬車が走る過ぎる活動がある。しかし第四スタンザでは今までは場面が全く異なり、想像の世界から、はっと我に帰った作者の目覚めた意識—回想感情—が歌われている。ルース・ミラー（Ruth Miller）は詩人はここで永遠に入ったと指摘している。つまり、彼女はここで永遠の憩に入ったと考えられる。（この心境の変化が後に述べるテンポに表現される。）

以上述べてきたことから日本の学者加藤菊雄氏が「ディキンソンにとって最早エデンや来世が存在しないということは明白である^⑥」とか「存在するのは一切の空白と冷たさだけである。彼女にとって永遠へと向った筈のものは一切の空虚に終ってしまったのである^⑦。」といった意見は到底容認することが出来ない。加藤氏は「序」に於いて詩人エミリーがケイト・アントンと、我々の倫理・宗教から口にするだに恥ずべきである、ある種の関係にあったという仮説を立てている^⑧。信仰のない者が宗教詩を理解することがどんなに困難で危険かを氏は晒しているのである。又、日本のほとんどの英文学者がこのようであることを思い、私は独り心に憂いを覚える。かかる仮説を持つ氏にしてそれに当然な結論を導びき得たのであろう。これ以上この点を追求するのは控えよう。

テンポの観点から言うと、一—三連は速く四、五連は非常にゆっくりしている。このようなテンポの変化—リズム感の変化—はミルトンの『ダモニス哀歌』にも現われている。『哀歌』九三行を境としてテ

ンポは緩やかになる。活動性から静止性へと移るテンポの変化はたとえば春・夏の自然の活動期から秋・冬の静止期への変化と同じである。詩に於いてこのようなリズムの形式が自ずと形成されたことはこの詩の普遍性を物語るものである。

(一)

ディキンソンの詩を評価するのに一つの判断の視準がある。それは次のジョン・ミルトンの徳に対する考えである、

I cannot praise a fugitive and cloister'd virtue, unexercis'd
& unbreathed, that never sallies out and sees her adversary,
but slinks out of the race, where that immortal garland is to
be run for, not without dust and heat.

Milton, *Areopagitica* (Yale ed. vol. two, p. 515.)

(勇んで外に出てその敵に会わず、不滅の花環がほこりと激烈を以って追われる競争からこそそこそ逃げ出し、試みられたこともない秘密の、脱走し修道院に閉じ込めた徳を称賛することは出来ない。)

これは正にエミリーの人生態度への批判である。人生態度は創作態度に結びつく。かくして彼女の詩はミルトンの価値があると思われたい。アレン・テイトも「ディキンソンは、キリスト教的な主題を本来

の深い信仰内容に手をつけないで、最も態度をあいまいにこれと対決してゐる」とか「ディキンソンの場合もダンのように、宗教的な真理にではなく、個人的な啓示に対する特異なほど過敏な関心を見いだすことができる……それは、宗教の面で伝統を欠き、道徳の面で衰退に向かっているエゴイズムである。宗教的にはそれは冒瀆であり、社会的には一つの文化が自己充足的でなくなり、精神的統合が崩壊しはじめたことを意味する」と述べている。^⑧

このような前提のもとで、ディキンソンの詩のいくつかを論じてみたい。

(二)

キリストの詩

Success is counted sweetest
By those who ne'er succeed.
To comprehend a nectar
Requires sorest need.

Not one of all the purple Host
Who took the Flag today
Can tell the definition,
So clear of Victory.

As he defeated—dying—
On whose forbidden ear
The distant strains of triumph
Burst agonized and clear!

(成功は成功しない人によって
最も甘美なものと考えられる。
神酒を理解するためには
最も苦痛な欠乏を必要とする。)

今日旗を獲得した

紅の全軍の中の誰一人として

勝利の定義をそんなにも、

明確に言える人はいない。

敗北し—死んでいく—彼ほどに、

その聞えない耳に

遠方で勝利の音楽が

苦しめられてしかも急激に襲いかかる—)

この詩の自筆の原稿は三種類ある。一八五三年に書かれたが、出版されたのは一八七八年 *A Masful of Poets* (Robert Brothers) に収められた。^⑧

この第一連をキリスト教的な信仰の表明として読むことが出来る。人が聖霊を得るためには非常な苦痛を要するということを歌ったものと見る。特にこの連最後の “To comprehend a nectar / Pegures so-rest need” はそれを最もよく表わす。“nectar” は神々(天使)の飲み物、換言すれば聖霊で、“a liquor never brewed” と彼女が歌っているものと一致する。それを理解する、つまり、味わうためには最も苦痛な困窮 (Sorest need) つまり、魂の渇きを必要とする。聖霊は最も貴重な宝物である。宇宙全体と聖霊は等しいと考えることもできる。従って、信仰を失うことは財産を失うことより大きいのである (“To lose one's faith surpasses / The loss of an estate”)。人が聖霊を与えられる時、無限の喜びを与えられる。この世の価値はちり、あくたの如く思われる。しかし、そこで、即ち、神の聖霊を受けるにふさわしい霊的狀態になるまでに人は大きな魂の苦闘、この世の精神との戦いを経て、勝たなければならぬ。そればかりでなく人は又自分の罪に深く目覚め、それを憂い、主の十字架の慰めを受けなければならぬ。それが “so-rest need” の内包する意味である。

このように最初に私は解した。そうすれば、エミリー・ディキンソンの深い宗教体験がここに表われていると考え、私は彼女を深く尊敬しようとした。それが今から十数年前のことである。しかし、今二連、三連と読み返すうちに彼女は別のことを歌っているのではないかという気持になった。

それは第二、第三連に於ける敗者の死に行く様への比重が全体的に見て余りにも大きすぎることにある。勝利を得ずに空しく死んで行く

兵士が勝利の意味を最もよく知っていると言っているのであるから、エミリイはむしろ敗者に対して同情があると考えざるを得ない。それは天国から地獄に落ちたサタンの立場に立って、天国の意味を考えることと同じである。

Arthur William Symonds (1865—1945) の小説に『シーワード・ラックランド』がある。^⑥ この主人公シーワード・ラックランドはマタイ伝十二の三一「人には、その犯すすべての罪も神を汚す言葉も、ゆるされる。しかし、聖霊を汚す言葉は、ゆるされることはない」を逆手に取り、彼がその罪を犯して神の義を明らかにして神の栄光を現わそうと決心する。これは荒野の誘惑に於けるサタンの考えと同じであって、イエスはそれに対して「主なるあなたの神を試みてはならない」(マタイ4の7)と言われた。実際、説教壇に立ち聖霊の御業は悪魔の業と宣言し、教会と村から彼は追われ、以後の彼の生活は惨めになる。そして終に彼は馬車にひかれて命を失う。彼の臨終に自分は自分よりも神の方を愛したと告白した。彼のこの考えや行為は決して神の栄光を現わすことにならない。それはむしろ神を冒瀆することになる。悪魔的な思想が窺われる。

さて、今シーワードの立場を考えてみると、彼は自分が墮落して命を失ったが、その時神の正しさを認めたのである。彼は罪を犯さないことがどんなによいことか、自ら大罪を犯して始めて罪を犯さないことがどんなによいことか身を以って体験しているはずである。しかし、その時はもう遅い。自分が聖霊を汚す罪を犯して神の栄光を現わそうと考えるのは悪魔的考えである。何とならば大前提として神は御

子を信する者が一人も滅びないようにこの世を愛して下さったのであるから、理由は何であれ人が自ら滅びようとするのは神の御旨に反する。従って、そうすることによって神に栄光を帰することは出来ない。シモンズはフランスの悪魔的な思想傾向に影響されていたと見るべきであろう。翻って、エミリイの詩を見ると右と同じ思想が感じられる。彼女はどうも敗北して死んでいく兵士の方に同情を寄せている。勿論、敗北者には同情を禁じる理由はないけれども、余りにも敗北者を評価しすぎる。敗北して死ぬのでなければ勝利の本当の意味が分からないとするのは、地獄に落ちなければ天国の本当の意味が分からないとする考えと同じであり、これは悪魔的な考えである(ルカ伝十六の十九—三三参照)。エミリイの作品にこのような思想の一端が見えて私は彼女の作品に一種の警戒心を覚える。アレン・ライトはコトン・マザー (Cotton Mather, 1639—1728) なら彼女を魔女として焚き殺したであろうと言ったが、^⑦ 右の論述からテイトの言葉に真理性はある。彼女の詩の一部にかかる悪魔的傾向があるのを見逃がすことは出来ない。

David T. Porter はこの詩を高く評価して、

The best known of the poems about compensation is undoubtedly "Success is counted sweetest." It is one of her finest works from early years.^⑧

と、この詩を報償の概念の詩として優れているとしている。Capps も

この詩にエマソンの影響を見ている。^⑧しかし、William R. Sherwood はこの詩に於いてさえエマソンの報價の哲学とは異なる、ある種の自己主張を認めている。

The function of Emerson's essay is to demonstrate the essential justice of nature: the function of Emily Dickinson's thought — and of the art through which it was expressed — was to find an area in which the need for self-assertion could be met in a universe firmly ruled by authoritarian God.^⑨

シャーウッドのこの見解は今述べた我々の考えと共通する。

(四)

(一)と(三)に於いて私はディキンソンの否定的な面をのみ見てきた。それはミルトンのな道德観に支えられた觀察であった。彼の道德観に対して全く対照的な意見がある。それは『キリストにならいて』の著者トマス・ア・ケンピス (Thomas a Kempis c 1380—1471) の次の文章である—

「沈黙と安息のうちに信心深い魂は進歩向上して、聖書のふかいまことを学ぶのである。そこに人は、涙の流れを見出し、それによって夜毎に洗い浄められよう、そして、そのためあらゆる浮世の騒がしさから遠くへ離れば離れるだけ、それだけ自分を造つ

た者(神、造物主)に親しくなるのだ。されば人が知人や友達から身を遠ざけると、その人には神が、聖い天使たちを引き連れ近づきたものである。世間から引込んで神の救いに心を致すのは、魂を等閑にしておいて奇蹟をおこなうのより優っている。されば修道者にとっては、偶さかにしか外へ出ず、人に見られるのを避け、また人を見ようと欲しないのが望ましいことである。」

(大沢章、吳茂一訳トマス・ア・ケンピス『キリストにならいて』岩波文庫、昭和三十七年、四六頁。)

彼女は、トマスの愛読者であった。^⑩しかも、彼女はビューリタンの父親に服従して、この世的な人々を避けて生活していた。しかし、彼女の父親 Edward Dickinson は国会議員、アマースト大学会計理事であり、地方の最上流階級に属していたため、家に訪れる名士も多かったことであろう。従って、右のトマスの勧めのような全くの修道院の生活を彼女は送っていたのではない。しかし、彼女の一家の厳肅な宗教的雰囲気は世俗の精神を寄せつけなかったであろう。

彼女の創作的生涯に於いて “Rev. Charles Wadsworth pastor of the Arch-street Presbyterian Church Philadelphia” との出会いは大きな意義を持つ。^⑪一八六〇年のはじめ頃から彼女は彼に親しく接する機会を得たが、一八六二年春彼がサンフランシスコの Calvary Church に赴任してからは彼女は所謂「白い選択」を取り、世間とはますます没交渉になり、屋敷から一步も外に出ることはなかった。^⑫このような生活の中から如何なる詩が創作されたかを見よう。

I taste a liquor never brewed,
From tankards scooped in pearl
Not all the vats upon the Rhine
Yield such an alcohol!

Inebriate of air am I,
And debauchee of dew,
Reeling, through endless summer days,
From inns of molten blue.

When landlords turn the drunken bee
Out of the foxglove's door,
When butterflies renounce their drams,
I shall but drink the more!

Till seraphs swing their snowy hats,
And saints to windows run,
To see the little tippler
Leaning against the sun!

(発酵されない酒を真珠となって
吸み上げた大ジョッキから味わう、
ライン河の大たるも

このようなアルコールを作れない!

空気に酔い、
露に誘われて、

ふらふらし、限らない夏の日々、

きらきら輝く青空の居酒屋から出てくる。

主人がジキタリスの戸から

酔った密蜂を追い出す時、

蝶々が一杯の酒を断念する時、

私はそれだけでもっと飲むばかり!

終に天使が雪の帽子を振り

聖徒たちが窓辺に走り寄り、

小さな酒飲みが太陽に

もたれかかっているのを見る!)

この詩の原稿は一八六〇年頃に書かれ、*Springfield Daily Republication* の一八六一年五月四日付の“Original Poetry”の欄に匿名で発表された。

スピノザ (Spinoza, Benedict 1632-77) は神に酔うた人であると言われている。ベートーヴェンの第九シンフォニーはシラーの詩 *An die Freude* を音楽化したものであるが、この詩の次の一節はこのディキ

ンソンの詩の内容と重なる。

Freude, schöner Götterfunken
Tochter aus Elysium,
Wir betreffen feuertrunken,
Himmliche, dein Heiligtum.

(飲びよ、美しい神々の火のきらめき

楽園からの娘よ、

我らは火のように酔って、

天国の汝の聖堂に越かん。)

このディキンソンの一篇の詩は右の意味で、彼女が神に酔うたことのある人であることを語る。この詩が伝える真の意味を理解できる日本人はいるであろうか。少なくとも私には彼女の経験が分かるように思えるのである。

神に酔うとは神から無限の喜びを与えられることである。その時は生は喜悦と化し、生きていること自体が喜びになってくる。その意味でこの詩は “the sharp awareness of the present and the intense vital experience” を歌ったものと言えるであろう。原罪のなる前の楽園にあった人祖の生活もかくやと思われる。原罪以後の我々はそこに達するには測り知れない信仰の戦い、霊の苦闘を経て、キリストより罪の縄目から解放される、その時に与えられる生がこの詩に歌われて

いる。

果たせるかな、Rebecca Patterson はこの詩が書かれた前後にはエミリーの心境が苦痛にあることを “oral symbolism” のさしから推論している。

……the scanty oral symbolism of 1860 sounds more intense and painful than that of the previous year.⑥

しかも、この詩の中にもその苦痛の跡を留めていると思われるイメージがある。“the vats upon the Rhine” は Patterson に「あれは “am Main Frankfurt berries” の変形だ、Frankfurt はエミリーが Margaret Fuller の訳で読んでいたドイツの女流詩人 Bettina von Armin がこのライン河で自殺をしたところである。これによってエミリーの心の一端を窮い得る。加藤氏は一八六〇年は彼女にとって痛魂の時であったことを記している。この心の悲しみがエマソンとかソローの現実離れた思想——それを Cappps は “flights of Transcendental ecstasies” と表している——とは異なり、現実根ざしたものにしている。たとえばこの詩はエマソンの “Bacchus” に類似しているがエマソンの詩には「悲しみ」の要素はない。⑦

この詩を少し見ることにしよう。“liquor never brewed” は人工でない酒、人間の手では作られていない酒、即ち、神の酒、聖霊である。この種の酒に酔うと、自然風物のどんな細いものにも喜びを感じる。それをディキンソンは “Inebriate of air am I / And debauchee

of dew”で表わしているものと思われる。大気にさえうっとりとなり、露にさえ味覚を覚える。アマーストの父の庭に出て自然に触れた感じを素直に出している。夏の日、蝶々、青空、密蜂、ジキタリスといった自然物は彼女と自然との触れ合いを物語る。非常に静かな雰囲気、恰も聖フランシス (Saint Francis of Assisi, c 1182—1226) が自然に接するような静けさが漂っている。僅かな敷地内の自然物であるが、それらは象徴化され、普遍性を帯び、無限の地平的な拡がりを暗示する。彼女独りであるが、決して淋しくはなく、快括で明るい。地平的な無限の拡がりの次に、垂直的な無限の高さが最後の連で歌われている (“seraphs”, “saints” がそれを示している)。実に彼女は狭い所に住んでいて無限の宇宙を有し、その中心となっている。しかし、その宇宙の無限の拡がり、高さの中に置かれた彼女の姿が “the little tripler” で示される。宇宙から見れば彼女は小さい点にすぎない。これが人類の小ささ、非哀感、宇宙的悲しみ (Cosmic Sorrow) を感じさせている。次の詩に移ろう。

Much madness is divinest sense

To a discerning eye;

Much sense the starkest madness

’Tis the majority

In this, as all, prevails.

Assent, and you are sane;

キリスト教と英米文学

Demur,—you’re straightway dangerous,
And hand’l’d with a chain.

(見分ける目にとって

多くの狂気は神的感覚。

多くの狂気は本当の狂気。

すべての場合と同じく、この場合も

多数者が幅をきかす。

同意すると、人は正気。

反対すると—人はたちまち危険人物、

鎖で扱われる。)

この詩の原稿は一八六二年頃書かれ、一八九〇年の『詩集』で出版された^⑧。

まことに、この世の人は気狂いというレッテルで真理の人々をいかに葬り去って来たことか。しかし、彼らの目的は果たせず、葬り去られた人々が人類の福祉に貢献してきた。それ故に、今この世でもてはやされている人々は偽り者である。人類の名に於いて追放される人々である。ミルトンはこの事を次のように表わしている、

…… so shall the world go on,

To good malignant, to bad men benign, (XII, 537—538)

(……このように世は進んで行く)

善良なる者には悪意が、邪悪な者には親切が向けられて、)

世の中を皮相に解する人は右の考えは解せないものであらう。善人は好かれ、悪人は嫌われるというのがこの世の人々の常識である。それはディキンソンも「多くの狂気は本当の狂気」と歌っている水準の狂気である。しかし、本当の真理、特に宗教的真理——を得た人はこの世の人々のむき出しの憎しみを買う。何故か。それは、その真理がこの世の人の肉に反するからである。肉とは肉化した精神、あるいは堕落した魂である。この種の狂気は本当の正気である。イスラエルには古から預言者を尊敬する風潮があった。預言者が語る言葉が彼らの救いにつながったからである。しかし、国民が墮落してくると、彼らは耳触りのよい言葉を好み、真理に対して逆らうようになる。そして、真理を語る人を迫害してきた。キリスト・イエスに於いてそれは頂点に達した。そして、キリスト・イエスに連なる人々にも、墮落の精神は現代に到るまで、迫害を続け、汚名を着せつつある。それは特に同じキリスト教界にこの種の迫害は多い。キリスト・イエスに極刑を執行したのは他ならぬ同胞の、同じ神を信じると称するユダヤ人、特に律法学者、祭司長達であったことを思うと、宣なるかなと思われる。又、これに近い迫害として、学問上の真理の提供者にもそれが及ぶ。知識階級にも又、その他様々の層の人間にもそれは真実である。文学作品に於いてはシェイクスピアの『ハムレット』に於いて真に正気の方が狂気となっている。ハムレットの狂気、オフィリアの狂気も彼ら

の心が純真であったところに生じている。^⑧

ディキンソンがこの事情を知り、歌ったことは彼女自身、シェイクスピアの影響を受けたり、又自ら何らかの意味で迫害された経験があることを示している。彼女には前にも指摘した通り、一種悪魔的な性格を示す詩がある。しかし、それにも抱わらず、否、それ以上に彼女は本当の真理を握っていたと思われる。この点を我々は誤解すべきでない。

(五)

If I can stop one heart from breaking
I shall not live in vain.
If I can ease one life the aching,
Or cool one pain,
Or help one fainting robin
Unto his nest again,
I shall not live in vain.

(もし誰かの胸が裂けるのを止め得ば
私は無益に生きないだろう。
もし誰かの人生の痛みを和らげ、
苦しみを冷やし得ば、
あるいは気を失いかけた駒鳥を助けて
その巣にもどし得ば、

私は徒らに生きることにならない。)

この詩の原稿は一八六四年頃に書かれ、一八九〇年の『詩集』に収められた。この時、スタンザ別に区切られていなかった。

これは犠牲愛^{アガペー}を歌っている。しかし、彼女自身の願望に終わっている。心の中に犠牲愛を称えるけれども、彼女自身の体験ではない。心の中に犠牲愛を考えているのみで彼女自ら、傷ついた人をいやした経験^{経験}を歌っていない。この点、作者は言葉のみの人という非難を甘受せねばなるまい。単に言葉だけであれば人はどんな立派なことでも表現することが出来る。

この詩を更に深く読むと、彼女には確かに犠牲愛実践の経験はないけれども、彼女の心に粉れもない愛が湧いている。これは恐らく、彼女が神と交わって与えられた恵みによって生じたものであろう。もし、彼女の行動圏にその愛の対象となる人や動物がいたとすれば、彼女はその愛を実践したと思われる。彼女には偶々それに出会わなかった。心の中にこのような愛があれば彼女は義と認められる。パウロの義認論は行為ではなく信仰によって人は救われると説く。この点から、彼女は行為はなくとも、神に義とされる。この詩を著し得たことは彼女は祝福を受けた一つの証拠であろう。

(六)

I shall know why, when time is over,
And I have ceased to wonder why;

キリスト教と英米文学

Christ will explain each separate anguish
In the fair schoolroom of the sky.

He will tell me what Peter promised,

And I, for wonder at his woe,

I shall forget the drop of anguish

That scalds me now, that scalds me now.

(一生が終る時に、何故か分かるでしょう、

そこで何故かといぶかるのを止めてしまいました。

キリストは空の美しい教室で、

苦悩の一つ一つ説明するでしょう。

彼はペテロの約束を教えるでしょう、

すると私は彼の苦しみを不思議に思っ

私を今煮ている、今私を煮ている

苦悩のひたたりを忘れるでしょう。)

この詩の原稿は一八六〇年頃に書かれ、T. W. Higginson によって *Christian Union* XLII (一八九〇年九月二十五日) に寄稿されて載せられた。原典は一八九〇年の『詩集』のそれと同一である。

世を避けて生きたディキンソンを苦しめているものは何か。彼女はそれを明確にしていない。一口で言えば、信仰から来る様々の迫害、

苦しみであろう。人々の悪意ある批判、等々であったであろう。そして、その最大のものは神が信じられなくなることであろう。これこそ十字架でのイエスの苦しみに通じる、*“The scalding anguish is the doubt voiced in ‘Sabachani, why hast thou forsaken me?’”*^⑧とキヤプスは解している。彼女は宗教上の悩みを *“What is — ‘Paradise’ — (No. 215) に表わしている。*

しかし詩の調子からこの場合の悩みは寧ろ現世から来るより具体的なものと解す方が自然なように思える（特に最後の一行の生々しさから）。それは彼女の果たされない人への恋情であったかも知れない。真の人と思うが故に、彼との別離は死ぬより苦痛であったであろう。（ディキンソンが「彼」(He)と言う場合、それはビューリタンが考えるように「神」「キリスト・イエス」を意味する。しかし、この詩にそれは表わされていない、それ故に、彼女に控え目があり、彼女の悩みが地上の人を対象としたものであることが考えられる。）神への信仰を抱いているが故に、その思いは純真であったであろう。毎日毎日、心が澄んでくる時、いつも彼女の霊に映ってくるのは、彼の姿であったであろう。霊に感じる程、近い存在、しかし、お互い遠く離れている、しかもそれは果たしてはならぬ恋情であった。胸をいつも苦しみ続けているこの思い。崇高な殉教者のような思いではないが、人間の魂をこれほど甘美にしかも、苦痛にさせるものはない。彼女はそれを胸に秘め、独りで耐え、朽ち果てる。この苦しみ、この苦しみをいやしてくれるのはキリストの十字架の苦しみと愛だけである。彼女は神の前に何も神としなければ、その苦痛は大いに和らげることが出来たであろうに。自分の思いを絶対視

するところからかえって苦しみは増す。この世の営みはすべて一時的なもの、神を求めることが唯一の人生の目的であれば、すべては喜びに変わることであろう。この世の物は空しいことを彼女は十分悟るべきであろうと私には思われる。この一生が終る前に彼女は歓喜の人となったであろうに。彼女はこの詩に於いて苦難は人を天国に行かせる教育的な方策であるということを歌っている。^⑨エマソンの「報償」の概念も見られる。

(七)

To lose one's faith surpasses

The loss of an estate,

Because estates can be

Replenished, — faith cannot.

Inherited with life,

Belief but once can be;

Annihilate a single clause,

And Being's beggary.

(信仰を失うのは

財産をなくすより大きい、

財産は再び満たすことが

できる、——信仰はできない。

信仰はただ一度しか、

人生に引きつがれない。

たった一箇条でも破棄すれば、

「存在」の乞食になる。」

この詩の原稿は約一八六二年に書かれ、一八九六年の『詩集』に
“Lost Faith”^⑥の題で収められた。

人生の目的は神・御子・聖霊である。他の一切のものは使用するために存在する。我々はともすれば、理性を失ない本来の目的を忘れ、手段を目的と取り違えて、それを得ることに苦闘するようになる。神は人類を慈しまれ、各人に十分あり余る程の善きもので満たして下さる。そのままにして十分満足できる、否、飽き足りて余りある。人があせつてあくせく求めるものは本来の目的ではない。しかし、それを得るためには肉の苦しみを通さなければならない。しかし、本来の目的は天よりマナの如く自由に無料で与えられる。この世のものを求めず、永遠不滅の愛を求めることに人生の本当の意義がある。人生のあり方がこの逆であるとその人には破滅が待つ。

「信仰を失なうことは財産をなくすより大きい」と歌われている。信仰こそ神との正しい関係を維持するものである。その信仰が失なわれると本来の目的が見失なわれる。財産は一時的に借りて使用するものであるが信仰は永遠に続く人の目的である。これら両者のいずれが大きいかは自ずと明らかであろう。この世のものは失っても我々が属しているこの世のものであるが故に手にすることはできる。しかし、

信仰はこの世を越えたものを目的とする故、形なく目に見えず、手で触れることもできない。それを得るのは人間の魂である。有って無きが如く、又無くて有るが如きもの、それが信仰である。実際にそれが有る者もそれが無い者も表面的・数量的には同じである。財産はそれを持つ者と持たない者との表面上の区別を明確にする。信仰は目に見えないだけに、それを持つことは非常な精神力と魂の鮮明な意識を必要とし、一度これを捨てれば何かの代償で入手できるものではない。それは人生の一回限りの厳肅な事実である。それ故に、「信仰はただ一度しか、人生に引きつがれない」とディキンソンは歌う。

(5)

Through the straight pass of suffering

The martyrs even trod,

Their feet upon temptation,

Their faces upon God.

A stately, shrunken company;

Convulsion playing round,

Harmless as streaks of meteor

Upon a planet's bound.

Their faith the everlasting truth;

Their expectation fair;

The needle to the north degree
Wades so, through polar air.

(苦難の真直ぐな狭い道を通して

殉教者達は変らず歩む、

その足は誘惑を踏みつけ、

その顔は神を仰ぐ。

堂々たる、救済された仲間達、

動乱が周りで猛るとも、

惑星の領域を襲う流星の

輝きのように害されない。

その信仰は永遠の約束、

その期待は汚れない。

北極を示す針は極地の大気を通して

そのように骨を折って進む。)

この詩の原稿は二つあり、両者とも一八六三年頃に書かれた。三つ目の原稿が書かれたと知られているが現在、失なわれている。これは *Independent*, XLIII (12 March, 1891) に、“The Martyrs” の題で発表された。

この歌の中にこめられた宗教的信念はある種の読者の共感を得るで

あろう。現代にはありし日における如き宗教的殉教者の出現は見られない。これは社会が進歩し、国の憲法・法律が基本的人権・宗教、集会・結社の自由等々を保証し、宗教活動が公認されているからであろう。昔ならば国家的規模で迫害された信仰の人は今では彼が属する小さい社会、職場、地域社会の規模で迫害を受ける。国家を相手とするのではなく切れば血の出る自分の属する社会を相手とするのであるから、ある意味では戦いにくい、非常に孤独で、個人的になる。現代で宗教的殉教者は名も知れない、社会からは理解されず誤解を受け、不遇な人であらう。しかし、その人の心の世界は右の詩に歌われている高貴な戦いの世界である。

何故真の人間は苦難を受けるのか。悪人が苦難を受けるといのが社会の考えである。しかし、悪人が苦しむのと同じく、真の人間は社会から大きな苦悩をこうむる。それは真の人は心が高貴で墮落していない、この世の人々が好んで為すことはしない。つまり社会からはこの点に於いて孤立している。第二に、彼は他の人に対して攻撃をすることを知らない。すなわち、彼はおとなしい人であって、悪口やかげ口など知らない。だから、この点において人々から軽く見られ、弱者にされる。第三に、彼の心は素直であり、この世の人ならば勇気を出して行えないような意見を出す。この意見は当然のものであるが、この世の人々から憎まれ、悪評を受ける。

このようにして、信仰の人には苦難の狭い道が備えられる。彼の人生は茨の道・迫害の道、苦難の道である。サタンは試みる者として幾

度もと現われる。しかし、信仰者は崩れず、常に進んでいく。この世のありとあらゆる不当な欲望は彼の心にはない。誘惑が攻めて来ても、彼の所はす通りする。彼の心は常に天上のイエス・キリストに向いている。苦難の狭い道は神と共の道――イマヌエルの道――である。

無名の、社会の片隅みで、人知ることなく、殉教の道、苦難の道、迫害の道を歩んでいる者は一人ではない。世界に無数という。彼らは互いに連絡をとることもなく、互いに助け合うこともなく、夫々独立して自分の道を黙々と歩んでいる。彼らはこの世を超えている、生死は神の御手に任してある。故に死を恐れない。彼は毎日に自己に死んで他者なるキリストに生きる。この世は彼の目的にあらず、天に国籍を持つ。戦争・天変地変が起きても彼は恐れない。それらが彼に与える害はない。

彼らの信仰は永遠の約束、天に召され祝福を受けることである。これはしみも汚れもない望みである。わたり鳥はそのコースを知り、さは遠く海を隔てても生まれた川にもどってくる。磁石の針は北を指す。そのように救済された者は天国をさして進んでいく。それが彼らの道なのだ。

人間の魂を磁石にたとえたところにディキンソンの正確な人間への洞察の閃めきがあるように思える。筆者がこの論考をまとめている間に興味深い新聞記事があった。それは、京都で第三回国際フェライト会議でプリンストンのジョセフ・L・カーシュビンク教授は人間を含めてすべての動物の体内に磁石組織があると推論し、実際に彼は高性能の顕微鏡でアカゲザルの脳幹に磁石組織を確かめたという。人間の

場合はまだ脳の部分には研究が及んでいないが、副腎に磁性物質が存在することを最近つきとめたと報道されている。バクテリアに磁性物質が存在することはマサチューセツェ科大のリヤード・フランケル博士とブレイクモア博士によって発見されている。ハトの脳やハトの腹部にも磁鉄鉱粒が発見されている。ミツバチの方向探知能力やハトの帰巢能力もこの磁性物質と重要な関係があるものとみられている。

(九)

Far from love the Heavenly Father

Leads the chosen child:

Offener through realm of brier

Than the meadow mild.

Offener by the claw of dragon

Than the hand of friend,

Guides the little one predestined

To the native land.

(愛から遠く離れて天なる御父は

選ばれた子供を導き給う。

温和な牧場よりは、もっと度々

茨の世界を通して。

友人の手よりはもつと度々

龍のつめによつて、

予定された小さき者を

その魂の故郷へと案内し給う。)

この詩の原稿は一八六五年頃に書かれ、一八九六年の『詩集』に収められた。

選ばれて、予定に入つた神の子供達が何故人生に於いて数々の苦い体験を経るのかその理由がこの詩に歌われている。読者の幾人かはこの詩に大いに慰めを与えられるであろう。それは苦難は神の御旨で、これによつて、人は永遠の故郷に導びかれていると実感するからである。善き者には苦しみが多いのは、彼が神の導き又恐ろしき御手の中にあることを証明するものである。

神は愛なりと聖書にある。だから、神を信すれば直ちに幸福が与えられると人は考えやすい。神を純粹に信仰すればするほど、祝福を与えられる。これは宝石よりも尊きもので、この地球よりも尊きものと思われる。このような体験がない者は涙を流して我々から去って行かねばなるまい。我々には主より、天の刻印が押されているのである。

とはいえ、祝福を受けることはこの世の楽しみ、幸福を無みすることであるのだ。更には尊い宝、祝福が奪われるに及んで彼は二重の不幸者となる。神の愛を失つたものとしての不幸、然して、この世の幸いを失つたものとしての不幸、この二つの不幸を背に負う。信仰者の悲哀はこの世の人の悲哀よりも深い、悲哀が深いのはそれだけ祝福がある

ことの裏返しである。御父はその愛を一時控えて愛する者に苦難を味わさせる。この世の茨の中で額に汗をして生活させる、又、この世の邪惡を認識させ、神の痛める心を悟らせる。心の柔和な人々にあつては平和と喜びを感じるであろう。しかし、信仰者は邪惡な人のただ中に置かれ、その邪惡に苦しまされつつ、主の十字架の苦しみを知る。苦しみの中に眞の喜び、十字架の祝福を味わう、このようにして、御父は小さき者を、この世の肉の故郷ではなく、新生を遂げさせた魂の故郷へと帰らせて下さるのである。

ディキンソンが苦難の意義をこのように詩に歌い上げたことは、彼女に深い悲しみと又深い信仰が同居していたことを示す。彼女の苦しみとは何であつたろうか。それが何であつたにせよ、彼女は深く苦しみを抱きつつ、救済の道を歩んでいたのである。

(H)

Superiority to fate

Is difficult to learn.

'Tis not conferred by any,

But possible to earn.

A pittance at a time,

Until, to her surprise,

The soul with strict economy

Subsists till Paradise.

(運命に勝ることは

学ぶのに難しい。

誰もそれを教えてくれないが、

一度に少し、

受けることが出来る。

終に、魂は自分でも驚く程に

厳しい摂理を身に受けても

天国まで持ちこたえる。)

この詩の原稿は一八六六年頃に書かれた、その題名は“superiority”
to Fate^⑤に出ている。

若者は老人の忠告を受け入れるのを拒む。彼は自ら試して始めて一歩一歩前進することが出来る。運命とは何か？ それは自分の意志に他ならない。しかし、個人の意志はその環境によって大きな影響を受ける。自分の欲することを為さず、為し得ず、深い悲しみへと沈む。

幸福は彼から逃げ去っていく。運命は自分の意志の決定といえども、人は既に環境に支配され、真の希望を得ることはできない。このように考えるのがディキンソンの運命観である。本当の運命は神の意志に給うところのものである。故に、神に従順である間、運命は人の救済となる。その時、偽りの運命は消え去り、真の運命が現われる。この世の幸福は真の幸福ならず。不幸は本当の不幸ならず。この世の価値観が彼に於いて一回転する。

人が人生の経験を積むたびに一つ一つ本当の運命を悟るようになる。運命に勝ることは本当の運命を知ることである。神の意志、摂理が

運命であることを知り、自分は滅びではなく祝福に生かされていることを自覚する。そうすれば、彼は古い運命に十分耐えていくことが出来る。そして終に永遠の祝福、天の神に入る。これが人の一生であって、これ以外にはない。ディキンソンはこれをこの詩に表現したのであろう。

彼女は現実の社会のただ中で社会悪のために苦しんだことはなかった。この点、彼女の詩人としての規模は小さいと言わなければならない。それを認めた上で、彼女の詩を理解するならば正当な評価がなされると思われる。彼女には人に言えぬ愛の問題があった。それが神学思想、具体的には彼女の信仰とからみ合って、生涯彼女に苦しみをもたらした。その苦悩も徐々に彼女の信仰に克服され、平和へと変わった。彼女は神の国を待ち望むことは人生最大の目的を持つことが出来た。人が彼女に見習うべきはここにあるのである。

彼女は自分の詩集を結ぶにあたって次の如く、歌っている、

This is my letter to the world,

That never wrote to me, ——

The simple news that Nature told,

With tender majesty.

Her message is committed

To hands I cannot see;

For love of her, sweet countrymen,
Judge tenderly of me!

(これは世の人々への私の手紙、

私には手紙を書いてくれなかったけれども、——

「自然」が優しく威厳を以って語った

素朴な便り。

その伝言は私が会えない

人々の手に委ねられる。

優しい同胞の皆さん、自然への愛がおりなら、

私を優しく判断して下さい。)

この詩の原稿は一八六二年のはじめ頃に書かれた。T. W. Higginson に *Christian Union*, XLII (25 September, 1860) に載せられた。^⑧

一八八六年五月十五日にディキンソンが亡くなり、葬式も終って、彼女の妹 Lavinia Dickinson ^⑨ がエミリー^⑩の机の引き出しを調べてみると、注意深く縛った詩の包 *letter to the world* が見つかった。彼女は生前に詩人としての名声を得ることを諦めていたが、*“……it was evident that she wished her poetry finally to meet the eyes of that world which she had herself always shrunk from.”* ^⑪ W. D. Howells は推測している。彼女は自分の詩がいつか人々に読まれる

であろうと考えていたと思われる。彼女のこの奥床しい心によって、それだけ我々は彼女を愛する気持を覚えるではないか。

先に彼女は生前名声を諦めたと言ったが、これは次の彼女の日記が示すように、

If fame belonged to me, I could not escape her; if she did not, the longest day would pass me on the chase……^⑫

彼女はそれを現世的利益として求めるのを諦めたのみであり、それを超克した真の名声は求めていたのである。この点、彼女の態度は全くミルトンの言い得る。シャウウッドはこの背景になる理由を考えている。彼女の気質が彼女を余りにも気むずかしくさせ、彼女には神から与えられた恵みがあつたので道徳的な知性が備わり、永遠性の観点から賞の奪い合いが余りにも愚かに見えた、しかも永遠の真の名声から言えばそうした騒ぎは哀れで軽べつすべきものに見える。それに加えて、神的靈感と人間の想像の神のような又神から与えられた力の結合を利用することは最も下等で品位を下げる種類の不当利益に耽ることであつた。^⑬ 以上によって、彼女の作品に対する態度には、単に日本的感覚の奥床しさだけではなく、絶対者に対する人間の側の真剣さがあることを知った。

私は彼女のこの願い *“Judge tenderly of me!”* に従つてこのエッセイを書いてきた。今から百数十年前に生きた一人の孤独な魂に私は親しみと愛を覚える。牧師ワズワース (Charles Wadsworth) がサンフランシスコに去つてからは、彼女はニューヨークランドの父親の屋敷から一歩も外に出なかつたと言われている。これについてキャプスは

次のように述べている。

But to limit her horizons to the house and garden of the Dickinson homestead is to underestimate grossly the capacity of her imagination. Although she says of her poetry, "This is my letter to the World / That never wrote to Me," she also declares that "There is no Frigate like a Book / To take us Lands away" without crossing any field, for she was both an omnivorous reader and a prodigious correspondent.^⑧

つまり、たとえ彼女はそこから外へは出なかったとしても、それが彼女が世間と没交渉であったことを意味しない—これは先に触れたことにも通じる—。彼女は書物を通して、特に聖書、シェイクスピア、メタフィジカル詩人達、バーンズ、エマソン、ブラウニングに大きな影響を受けていた。かくして彼女はアマーストから、野原を横切らずに大胆に国外に飛び立つことが出来たのである。とは言え、現実にはその足で外に出たことがなかったエミリーが、今、遙か時空を隔てた我々に手紙をくれたのであろう。そして、これが彼女には受け取られることのない私の返信であるのだ。人の世のはかなさと魂の永遠性がしのばれて一層エミリーの信仰を尊び、愛さずにはいられない。

註

- ① 日本に於けるエミリー・ディキンソンの書誌は加藤菊雄氏の『エミリー・ディキンソン研究』（研友社、一九七〇）によると大本剛士編 *Emily Dickinson: A Bibliography; Writings in Japan*（専修大学人文科学研究所年報（第3号）同研究所月報第四〇（四一）号）がある（二九四頁）。又最近中内正夫『エミリー・ディキンソン』（南雲堂）から新刊された

が、筆者はいずれも現時点では未見のものである。

- ② Thomas H. Johnson ed. *The Poems of Emily Dickinson* (The Belknap Press, Cambridge, Massachusetts, 1968), vol. two, p. 547 以下。
③ 佐々木妻夫・片岡美智・吉田秀和共訳 ロレン・ローレン著『ペーラー・マシーン 偉大な創造の時期—』（みすず書房、一九七〇年）一巻、四二—四三頁。
④ 同、三九頁。
⑤ 門馬直美監修者代表『最新名曲解説全集』I（音楽の友社、昭和五十四年）二七二—二七三頁。
⑥ 同、二六八—二六九頁。
⑦ 『内村鑑三信仰著作全集』二三卷（教文館、昭和四十八年）一九—二〇頁参照。
⑧ "She understood so well that the source of her poetic inspiration was Heaven" (Ruth Miller, *The Poetry of Emily Dickinson* (Wesley U. P., 1968), p. 195).
⑨ ペーターヴェンは次のように書いている。「神からは一切が清らかに流出する。私が幾度か情念のため悪へ混迷したとき、悔悟と清祓を繰り返し行なうことによって私は、最初の、崇高な、清澄な源泉へ還った。—そして、『芸術』へ還った。」（ペーターヴェンの手記より）『ペーターヴェンの生涯』（岩波文庫、昭和四十一年）一七一頁。
⑩ Denis Donoghue, "Emily Dickinson" *Six American Poets* ed. by Allen Tate (Minneapolis, 1965), p. 38.
⑪ 竹内敏雄訳ヘーゲル『美学』（岩波ヘーゲル全集上巻）八・九頁参照。
⑫ Jack L. Capps, *Emily Dickinson's Reading* (Harvard U. P., 1966), pp. 134—35 以下。
⑬ *Ibid.*, p. 88.
⑭ フレメン・テイット『エミリー・ディキンソン論』『エミリー・ディキンソン』（新倉俊一著、篠崎書林、昭和三十九年）九八頁。
⑮ この基本的メタファーは R. ブラウニングの "The Last Ride Together"

のそれと一致する。ここにブラウニングの影響が見られる。先に本文で触れた通り、キャプスは両詩の比較を行っている (cf. Jack L. Capps, *op. cit.*, pp. 88—89)°。そこに於いて彼はエミリーの詩の静けさ、ソフィヤニンへの詩の不安な要素を対照させている。

- ⑭ ミラーは次のように言っている “It is crucial to notice that her world is passed, at the grave; she drives on, with Immortality beside her into Eternity” (Ruth Miller, *op. cit.*, p. 194)°。エミリー・ソフィヤニンを第五巻を引用し、終結部は更に静かであると言っている “……the conclusion is quieter, there we no bugles,” (Denis Donogue, *op. cit.*, p. 39)°

- ⑮ 加藤菊雄『エミリー・ソフィヤニン研究』(研友社 一九七六年) 一五四頁。(一五二—一五四頁参照)°

- ⑯ 同、ii頁。

- ⑰ 新倉俊一、前掲書、九九頁。

- ⑱ 同、一〇一—一〇二頁。

- ⑲ Thomas H. Johnson ed. *op. cit.*, vol. one, p. 53 にある。

- ⑳ 以下の叙述は池田正著『十字架の夢』(北星堂)を参考にしたところが多い。

- ㉑ 新倉俊一、前掲書、一一一頁にある。

- ㉒ David T. Porter, *The Art of Emily Dickinson's Early Poems* (Harvard U.P., 1966), p. 170

- ㉓ “In fact, ‘Success’, the only one of her poems published widely enough in her life time to attract the attention of critics, generally attributed to Emerson” (Capps, *op. cit.*, p. 113).

- ㉔ William R. Sherwood, *Circumference and Circumstance: Stages in the Mind and Art of Emily Dickinson* (New York, 1968), p. 61.

- ㉕ Cf. Capps, *op. cit.*, pp. 61—62.

- ㉖ Cf. David Higgs, *Portrait of Emily Dickinson* (Rutger U.P., New Brunswick, New Jersey, 1967), pp. 79—84. 加藤、前掲書、一一三頁参照°

- ① 新倉、前掲書、九頁参照。

- ② Thomas H. Johnson ed. *op. cit.*, vol. one, p. 150 にある。

- ③ David T. Porter, *op. cit.*, p. 19.

- ④ Rebecca Patterson, *Emily Dickinson's Imagery* (The University of Massachusetts Press, Amherst, 1979) p. 32.

- ⑤ *Ibid.*, p. 167.

- ⑥ 加藤、前掲書、四一—五四頁参照。

- ⑦ Capps, *op. cit.*, p. 114.

- ⑧ Cf. *ibid.*, pp. 115—116.

- ⑨ Thomas H. Johnson ed. *op. cit.*, vol. one, p. 337 にある。

- ⑩ ショートランド・ソフィヤニンへの詩の関係については Capps, *op. cit.*, pp. 62—66 参照。特にこの詩の『ソフィヤニン』については六四頁参照。

- ⑪ Thomas H. Johnson ed. *op. cit.*, vol. two, p. 672 にある。

- ⑫ それについて加藤氏の詩の鑑賞・解釈は何と限定的であるか。彼はこの愛の対象をローランドしか考えている (前掲書、一七三—一七八頁参照)°。むしろ筆者は氏のような無神論的な愛の解釈に恐怖を感じる。氏は伝記を詩の中に読み込み過ぎているのではあるまいか。詩は伝記と密接につながっているから、それとは独立したものであることは言うまでもなく。

- ⑬ Capps, *op. cit.*, p. 49.

- ⑭ Cf. W. R. Sherwood, *op. cit.*, pp. 48—52.

- ⑮ Thomas H. Johnson ed. *op. cit.*, vol. one, p. 300 にある。

- ⑯ Thomas H. Johnson ed. *op. cit.*, vol. two, pp. 598—599 にある。

- ⑰ *Ibid.*, p. 1019 にある。

- ⑱ Ja, Wer auch nur eines Seele

- Sein nennt auf dem Erdenrund!

- Und wer's nie gekommt, der stehle

- Weinend sich aus diesem Bund!

- Schiller, *An die Freude*

④⑧ バターマンは他の詩では“dragon”は彼女の兄の Austin と推測してゐる。又“ホッリッ”はに諺に彼女の父親を“old serpent”とか“dragon Satan”で表はしてゐた (Paterson, *op. cit.*, p. 47)。この様な点から彼女の苦難は案外身近かのものではあつたかも知れない。

④⑨ Thomas H. Johnson ed. *op. cit.*, vol. two, p. 764 以下。

⑤⑩ Thomas H. Johnson ed. *op. cit.*, vol. one, p. 340 以下。

⑤⑪ ホッリッは兄 Austin を妹 Lavinia と仲睦まじくを互の子供時代の深い愛情を失つたことがなかつた。一八五三年ホッリッはオーステマンと手紙を書つてゐる。

“I think we miss each other more every day as we grow older, for we're all unlike most everyone, and are therefore dependent on each other for delight”.

(David Higgins, *op. cit.*, pp. 29—30)

彼女が死ぬ数時間前にマリアンは John Jameson 夫人に次のように語つた。

“How could I live without her? Even since we were little girls we have been wonderfully dear to each other—and many times when desirable offers of marriage have been made to Emily she has said, “I have never seen anyone that I cared for as much as you Vinnie.”

(David Higgins, *op. cit.*, p. 30)

⑤⑫ William R. Sherwood, *op. cit.*, p. 214 から引用。

⑤⑬ 新倉‘前掲書’二頁から引用。

⑤⑭ Cf. John Milton, *Lycidas*, 78—84.

⑤⑮ Cf. Sherwood, *op. cit.*, pp. 214—215.

⑤⑯ Capps, *op. cit.*, p. viii. See also pp. 1—2.